

幼児における特性推論の発達

—— 特性・動機・行動の因果関係の理解 ——

清水 由紀¹

幼児が、(性格)特性・動機・行動の因果関係や、特性は特定場面を越えて一貫した行動の原因となるということを理解しているかどうかについて検討した。具体的には、3, 4, 5, 6歳児の4群を対象に、動機・行動・結果からなる物語を提示し、動機情報を用いて行為者の特性をラベリングし他場面における行動予測をすることができるかどうかを調べた。また、動機・行動・結果の順に提示するか、行動・結果・動機の順に提示するかということが、それらの推論過程に影響を及ぼすかどうかについても調べた。その結果、特性のラベリングにおける動機情報の使用から、特性・動機・行動の因果関係は3・4歳から理解し始めているが、5歳からより確実に理解できるようになることが示唆された。そして行動予測における動機情報の使用と〔物語の動機—特性のラベリング—他場面における行動予測〕の回答の一貫性から、特性は特定場面を越えて一貫した行動の原因となることは、5歳から理解し始めているが、6歳からより複雑な場面においても理解できるようになることが示唆された。このような発達過程が見出されたのに加えて、幼児における特性推論過程には新近効果が見られることが推測された。

キーワード：性格特性の理解, 幼児, 因果推論, 新近効果

問 題

我々は日常的に、観察した他者の行動からその人物の性格特性 (personality trait) を判断したり、また性格特性からその人物の未来の行動を予測したりする。例えば、困っている友人を助ける他者を見て、その人は「やさしい」人だと判断し、未来に自分が困った時には助けてくれるだろうと予測する。こうした推論を行うのは、我々が「性格特性は特定場面を越えて一貫した行動の原因となる」という概念を持っているためである。このように他者の行動の予測を可能にする性格特性概念の理解は、社会的関係内において重要な影響を及ぼす (e.g., Eisenberg, Cialdini, McCreath & Shell, 1987)。では、一般に家庭内における親子関係から、幼稚園や保育園における仲間や教師との関係へと移行し、初めて社会的集団を経験する幼児は、この性格特性という概念を理解しているのだろうか。また、集団生活を経験していくにつれ、その理解は発達していくのだろうか。本研究では、幼児における性格特性概念の理解の発達を検討する。

性格特性 (以下「特性」と略記) の理解における発達は、これまで大きく分けて2つの方法により調べられてきた。(1)特性用語の使用を調べる方法と、(2)特性推

論の過程を調べる方法である。まず、(1)の方法では、子どもに自分自身や他者についての記述を求めた時に、特性用語を使用するかどうかについて調べる。この方法を用いた研究では、3歳児から「親切な」「意地悪な」といった特性用語の語彙は持っているが (e.g., Ridgeway, waters & Kuczaj, 1985)、自発的に使用するようになるのは6～9歳である (e.g., Livesley & Bromley, 1973; Ruble, Newman, Rholes & Altshuler, 1988) という見解で大方一致している。しかし、この方法を用いた研究からは、子どもが特性概念を理解した上で特性用語を用いているのかどうかは明らかではない。また、結果は回答するための言語能力を反映している可能性がある。

そこで、特性推論の過程を選択質問によって調べる(2)の方法が用いられるようになった。この方法では、被験者に、登場人物の特性を表わしている行動を提示した後、その人物の特性のラベリングと、他場面における行動の予測を求める。例えば Rholes & Ruble (1984)は、被験者に、登場人物が食べ物を持っていない他者に昼食の一部を分けるというビデオテープを見せた後、その登場人物について「全く親切でない」から「とても親切である」の4段階によるラベリングと、庭仕事の手伝いを頼まれたときにどうするかという予測を求めた。その結果、5～7歳児でもビデオテープで見た行動と一致した特性をラベリングできるが、一致した行動を予測できるようになるのは9～10歳からで

¹ お茶の水女子大学人間文化研究科
yuki@hss.ocha.ac.jp

ある、ということを見出した。この知見と同様、就学前児は、特性は特定場面を越えて一貫した行動の原因となることを理解していない、と結論づけている研究は多い (e.g., MacLennan & Jackson, 1985 ; Rotenberg, 1982)。しかしその一方で、就学前児でもそのような理解を持っているという結果を見出した研究もある (e.g., Gnepp & Chilamkurti, 1988 ; Heller & Berndt, 1981)。

このように知見が一致しないのは、登場人物の特性を表わすものとして提示した行動の内容により、次のような2点において被験者の認知の違いが生じているためであるという可能性が考えられる。第1に、登場人物の動機の解釈における違いである。例えば、向社会的特性を示すものとして提示された「昼食の一部を他者に分ける」という行動が、「相手を喜ばせようと思ったから」というような向社会的動機から生じたというよりも、「嫌いなおかずだったから」などの他の動機から生じたと解釈した被験者がいたかもしれない。第2に、結果の予測しやすさにおける違いである。提示された行動からどのような結果が起こるかということが予測しやすい場合は、被験者によっては予測した結果によって特性を判断したのかもしれない。例えば「昼食の一部を他者に分ける」という行動のみを提示された場合、「相手が喜んだ」という結果が容易に予測されるため、被験者は結果がポジティブだから特性もポジティブであろうと判断したのかもしれない。

これらの可能性は、上に挙げた先行研究が、特性と行動の関係のみを調べているために生じていると考えられる。Ruble & Dweck (1995) も指摘しているように、向社会的特性を持つ者は向社会的動機を持つから、向社会的行動を引き起こすのだといったような、動機を媒介とした因果関係を理解していないと、特性を理解しているとは言えないと考えられる。つまり、先行研究では特性→行動²という因果関係の理解を検討しているため、そこに含まれるべき特性→動機→行動という因果関係の理解がなされているかどうかについて明らかにしていない。そこで Heyman & Gelman (1998) は、なぜそのような行動をしたのかという動機と、行動の後どうなったのかという結果を行動から切り離して提示し、被験者がこれらの情報を特性推論の手がかりとして用いるかどうかを調べることににより、この点を検討しようとした。具体的には、5, 6歳児・2年生・5年生・成人各18名を対象に、まずある登場人物に関する行動・結果 (ポジティブ/ネガティブ)・動機 (ポジティブ/ネガティブ) からなる物語を提示し、その後その人

物の特性のラベリングと他場面における行動の予測を求めた。そして、全ての年齢群が、動機・結果の両方を手がかりとして、特性のラベリングと行動予測を行うという結果を得た。

Heyman らの研究は、特性→動機→行動の因果関係の理解について検討した点では評価されるが、次のような4点について、検討していない。第1に、Heyman らが対象とした被験者のうち5, 6歳児群が最年少であったため、より年少の幼児においても特性を理解しているかどうかは明らかではない。第2に、動機と結果のどちらが特性推論の手がかりとして有力なのか、またその点において発達の差異があるのかについて、明らかにしていない。第3に、物語の動機情報と特性のラベリング・他場面における行動予測との関連をそれぞれ別個に調べており、被験者がラベリングした特性と一致した行動を予測したのかどうかについて検討していない。第4に、物語の提示順序による影響を検討していない。複数の情報を提示する場合、各情報の提示順序によって、情報の使用のされ方が異なる可能性が考えられるが、Heyman らは、全ての物語を同じ順序で提示しているため、この点について検討していない。

第1の点については、3・4歳児は特性用語の語彙をもっており (e.g., Ridgeway, et al., 1985)、動機が明白な場合は動機情報を道徳判断のために使用する (Nelson, 1980) ことから、3・4歳児は動機と特性の関係に気付いている可能性がある。また、特性のラベリングよりも他場面における行動予測の方が可能になる年齢が遅いかどうかについて、これまで多くの報告がなされているが (e.g., Rholes & Ruble, 1984 ; Rotenberg, 1982)、これらの研究には前述したような方法論上の問題点があるため明確ではない。Heyman らにおいても、最年少の5, 6歳児がどちらの課題も可能であり、この点について調べられていないため、検討する必要がある。第2の点については、動機と結果が不一致である場合 (e.g., 動機がポジティブで結果がネガティブ) に、結果に引きずられずに動機を手がかりとして特性推論を行えるかどうかを分析することにより、明らかにできると考えられる。成人でも動機と共に結果も手がかりとするという Heyman らの知見より、結果に引きずられずに動機を用いることは難しく、特性→動機→行動の因果関係についてのより確実な理解が必要とされると考えられる。5歳後半から2つの物語の関係づけにおいて因果推論枠組みの可逆的操作が使えるという知見 (内田, 1985) から考えて、5歳で特性→動機→行動の因果関係

² 矢印の方向は、因果関係の向きを表わしている。

の理解における質的向上が見られると推測される。第3の点については、特性のラベリングと行動予測の回答の関連を調べることにより、検討できる。また、物語の動機と一致した行動予測をするというだけではなく、動機と一致した特性をラベリングし、さらにラベリングした特性を行動予測に用いる〔物語の動機—特性のラベリング—他場面における行動の予測〕が全て一致している推論は、成人の行う推論に近く、特性が特定場面を越えて一貫した行動の原因となるということのより深い理解を表わしていると考えられる。このような推論を行うことができるのは何歳からなのかを調べることによって、特性理解の発達過程をより詳細に検討できるだろう。第4の点については、物語を動機・行動・結果の順に提示する場合と、行動・結果・動機の順に提示する場合では、特性推論課題における手がかり情報の使用が異なるかどうかを検討することにより明らかにできると考えられる。予測される影響として、初頭効果 (primacy effect) あるいは新近効果 (recency effect) が考えられる。

以上より、本研究では、幼児における特性推論の発達について次の3つの仮説を検討することを目的とする。第1に、3・4歳児でも、特性→動機→行動の因果関係について理解しているが、年長になるにつれ、その理解が向上するだろう。第2に、特性が特定場面を越えて一貫した行動の原因となるということを理解する年齢は、特性→動機→行動の因果関係を理解する年齢よりも遅いだろう。第3に、〔物語の動機—特性のラベリング—他場面における行動の予測〕が一貫した推論を行えるようになるのは、年長になってからであろう。

あわせて、物語における手がかり情報の提示順序が、特性推論課題での手がかりの使用に影響を及ぼすかどうかについて検討する。

方 法

実験計画 年齢 (4; 3・4・5・6歳児) × 動機 (2; ポジティブ・ネガティブ) × 結果 (2; ポジティブ・ネガティブ) × 物語の提示順序 (2; 順向提示・逆向提示) の4要因計画。年齢のみ被験者間要因で、その他は全て被験者内要因である。以下、動機や結果のタイプとしてのポジティブはP、ネガティブはNと略記する。

被験者 東京都・茨城県内の幼稚園あるいは保育園に通う3, 4, 5, 6歳児各34名, 計136名。平均年齢はそれぞれ3歳9ヶ月 (3:1~3:11, 男児16名 女児18名), 4歳6ヶ月 (4:0~4:11, 男児14名 女児20名), 5歳5ヶ月

(5:0~5:11, 男児14名 女児20名), 6歳3ヶ月 (6:0~6:7, 男児19名 女児15名) であった。なお全被験者に対し WPPSI の言語性課題を実施し、言語能力が年齢に照らして一定以上に達していないと判断した者は、分析から除外した³。

材料 物語と課題の1セットにつき、A4版の彩色画6枚を用いた。物語提示においては、動機・行動・結果各1枚ずつを提示し、物語の再認・特性ラベリング課題・特性ラベリングの理由づけ課題においては、2人の登場人物が正面を向いている同じ1枚の絵を提示した。行動予測課題においては、2場面の状況を表わした絵をそれぞれ1枚ずつ提示した。被験者の前には、常に1枚のみ絵が提示されていたということになる。実験者が適宜絵を指差しながら説明・質問を行った。登場人物の性別は、ランダムに配置した。FIGURE 1に物語提示において用いた絵の例を示した。

手続き 個別面接による。被験者1人につき、動機のタイプ (P/N) ・結果のタイプ (P/N) ・物語の提示順序 (順向提示/逆向提示) が異なる8つの物語 (A~H) を提示し、各物語の提示後に特性推論課題を行った。よって被験者1人につき物語提示と課題のセットは8セットあった。その実施順序はカウンターバランスをとった。TABLE 1に物語Aの説明とその他の物語の概括的内

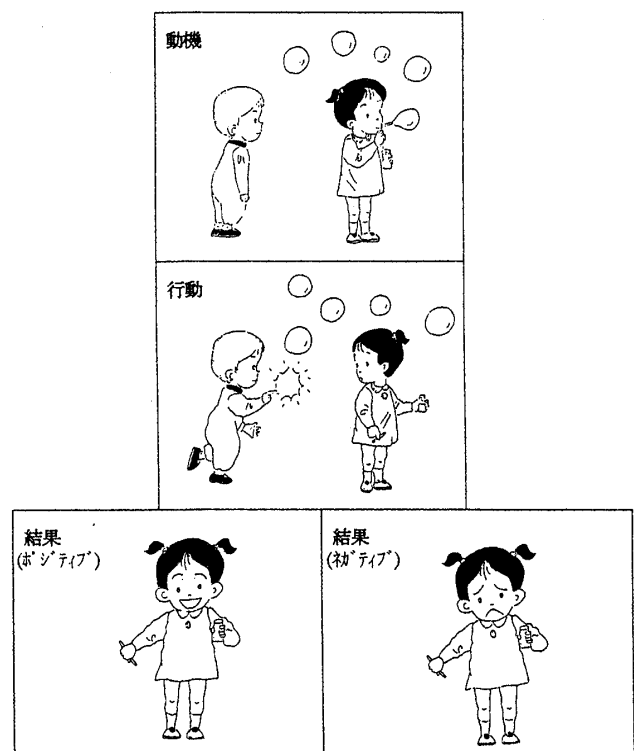


FIGURE 1 物語の提示において用いた絵の例

³ 除外後の人数が、各年齢群34名となった。

容を示した。課題において、質問が二者択一であった場合は、被験者の半数は片方の選択肢を、残りの半数はもう片方の選択肢を先に示した。時間的な都合などにより、1回で全ての実験を完遂できなかった場合、2週間以内の2回に分けて実施した。

TABLE 1 物語Aの説明とその他の物語の概要
物語A

動機	P・N「たかし君はけい子ちゃんのつくったシャボン玉を割ろうと思っています。なぜかって言うとなね」(※物語の提示順序が逆向提示の場合は、「何でたかし君がけい子ちゃんのシャボン玉を割ったのかって言うとなね」)
P	「たかし君は、けい子ちゃんが、わあ、上手に割れたねって喜ぶと思ったからです。」
N	「たかし君は、けい子ちゃんが、あー、勝手に割っちゃったって悲しむと思ったからです。」
行動	「たかし君は、けい子ちゃんの作ったシャボン玉を割ります。」
結果	P「けい子ちゃんは、わあ、上手に割れたねって喜びます。」
N	「けい子ちゃんは、あー、勝手に割っちゃったって悲しみます。」

	行為者の行動の内容	動機・結果に用いられた受動者の情動
物語B	受動者が作った山にトンネルを掘る。	P：トンネルが出来たと喜ぶ。 N：勝手にトンネルを掘ったと悲しむ。
物語C	受動者のノートに絵を描く。	P：ノートがきれいになったと喜ぶ。 N：勝手に落書きしたと悲しむ。
物語D	受動者にホースで水をかける。	P：暑かったけど涼しくなったと喜ぶ。 N：お洋服がぬれちゃったと悲しむ。
物語E	受動者に鬼ごっこしようと言う。	P：鬼ごっこ大好きと喜ぶ。 N：鬼ごっこ大嫌いと悲しむ。
物語F	受動者にあめを渡す。	P：あめ大好きと喜ぶ。 N：虫歯があるからあめを食べられないと悲しむ。
物語G	受動者にピアノを弾いてと言う。	P：ピアノ上手に弾けるよと喜ぶ。 N：ピアノ弾けないと悲しむ。
物語F	受動者にボールを渡す。	P：ボール遊び大好きと喜ぶ。 N：ボール遊び大嫌いと悲しむ。

(1)物語提示 動機・行動・結果からなる物語を提示した。動機は、向社会的特性を表わすP動機は行為者が受動者を喜ばせようとするという内容で、反社会的特性を表わすN動機は行為者が受動者を悲しませようとするという内容だった。動機の絵は、動機のタイプに拘わらず同じものを提示し、説明のみ動機のタイプによって異なっていた。行動は、動機や結果のタイプに拘わらず同じで、ポジティブ・ネガティブな価値を含まないニュートラルなものであった。結果は、P結果は受動者が喜んでいる、N結果は受動者が悲しんでいる、というように受動者の情動によって示した。結果の絵・説明とも、結果のタイプによって異なっていた。

物語の提示順序が順向提示の場合、生起順序と同じく動機・行動・結果の順に、逆向提示の場合、生起順序と異なり行動・結果・動機の順に提示した。

なお、物語の提示後、課題を行う前に、被験者が物語中の動機と結果に注意を向け、これらをより正確に記憶するように促すことを目的とし、物語の動機と結果の再認を求めた。動機の再認は「{行為者}は{受動者}のことを喜ばせようと思ったんだっけ？それとも悲しませようと思ったんだっけ？どっち？」(行為者{受動者}には、物語中の行為者 受動者の名前が入る。以下これに準ずる)、結果の再認は「{受動者}は喜んだんだっけ？それとも悲しんだんだっけ？どっち？」というように質問した。その際、動機と結果は物語の提示順序と同じ順序で質問した。被験者が正しく再認できなかった場合、もう一度同じ提示順序でその物語を提示することにより、記憶を訂正した。

(2)特性推論課題 特性ラベリング課題、特性ラベリングの理由づけ課題、行動予測課題の順に行った。

特性ラベリング課題 まず「{行為者}はどんな子かな？」と尋ねた。被験者の回答のうち、「やさしい子、いい子、えらい子、おりこう、気持ちがいい子」は向社会的特性を、「悪い子、意地悪、いやな子、いけない子」は反社会的特性を表わしていると実験者が判断した。このカテゴリー化について、実験後もう1名が判定を行ったところ、実験者との判定一致率は99.3%と高い値を示したため、実験者の判定をそのまま用いた。被験者がこれらの回答以外のものを答えるか、回答しなかった場合、さらに「{行為者}はいい子かな？それとも悪い子かな？どっち？」と質問した。続けて、被験者が回答したあるいは選択した特性が行為者にどの程度当てはまるかを、「{行為者}はすごく○○？それともちょっとだけ○○？どっち？」(○○には、被験者が回答したあるいは選択した特性(e.g., やさしい子, 悪い子)が入る。以下これに準ずる)というように尋ねた。

特性ラベリングの理由づけ課題 特性ラベリング課題の後、「どうして{行為者}が○○だと思ったの？」というように、ラベリングした特性の理由づけを求めた。回答内容が多様な意味にとれるような場合は、さらに「どうしてそう思ったの？」などの質問を続けた。

行動予測課題 まず、友達が道に迷って泣いている(迷子場面)、あるいは友達がバケツを忘れて困っている(バケツ場面)という場面を絵と説明によって示した。そして、それぞれの場面の絵において、友達の隣に描かれた行為者が、向社会的行動(道を教える, 自分のバケツを貸す)と反社会的行動(道を教えない, 自分のバケツを貸さない)

TABLE 2 特性ラベリング課題・行動予測課題の平均値

		順向提示				逆向提示				年齢別 平均
		P 動機		N 動機		P 動機		N 動機		
		P 結果	N 結果	P 結果	N 結果	P 結果	N 結果	P 結果	N 結果	
特性ラベリング課題	3 歳児	1.4 (1.3)	0.1 (1.7)	0.9 (1.5)	0.0 (1.8)	1.6 (0.8)	0.3 (1.6)	0.6 (1.6)	0.2 (1.6)	0.6 (0.1)
	4 歳児	1.3 (1.2)	0.1 (1.5)	1.1 (1.2)	-0.1 (1.5)	1.4 (1.2)	0.2 (1.4)	0.4 (1.4)	-0.1 (1.5)	0.5 (0.1)
	5 歳児	1.5 (1.1)	0.6 (1.4)	0.7 (1.5)	-0.5 (1.4)	1.7 (0.8)	1.4 (1.1)	0.2 (1.5)	-0.6 (1.3)	0.6 (0.1)
	6 歳児	1.6 (0.8)	0.5 (1.4)	0.1 (1.5)	-1.2 (0.9)	1.7 (0.4)	0.4 (1.3)	-0.5 (1.4)	-1.1 (1.1)	0.2 (0.1)
行動予測課題	3 歳児	0.8 (0.4)	0.8 (0.5)	0.9 (0.4)	0.7 (0.6)	0.8 (0.4)	0.8 (0.5)	0.8 (0.5)	0.7 (0.6)	0.8 (0.1)
	4 歳児	0.9 (0.4)	0.8 (0.6)	0.7 (0.6)	0.8 (0.5)	0.8 (0.5)	0.8 (0.6)	0.8 (0.5)	0.6 (0.7)	0.8 (0.1)
	5 歳児	1.0 (0.2)	0.9 (0.3)	0.9 (0.2)	0.7 (0.7)	1.0 (0.0)	0.9 (0.2)	0.9 (0.4)	0.8 (0.5)	0.9 (0.1)
	6 歳児	1.0 (0.0)	0.8 (0.6)	0.5 (0.8)	0.2 (1.0)	1.0 (0.2)	0.8 (0.5)	0.4 (0.9)	0.3 (0.8)	0.6 (0.1)

※ () 内は SD

のどちらを行うかを予測するように被験者に求めた。例えば迷子場面では、「お友達が迷子になって泣いています。{行為者}はこの子に道を教えるかな？それとも教えないかな？どっち？」というように質問した。被験者の半数は迷子場面、残りの半数はバケツ場面の課題を先に行った。また、被験者自身なら2つの予測場面においてどうするかを、8セットのうちのいずれかの課題で尋ねた。どの課題で尋ねたかはカウンターバランスをとった。

結 果

全課題において、性差と、物語の種類(A~H)の差は見られなかったため、以下の分析では要因に含めない。

1. 特性→動機→行動の因果関係を理解しているか？
一仮説1の検討

特性ラベリング課題 「{行為者}はすごく○○？それともちょっとだけ○○？」という質問に対して、向社会的特性・反社会的特性が「すごく」あてはまると回答したらそれぞれ+2・-2、同様に「ちょっとだけ」当てはまると回答したらそれぞれ+1・-1とした。また「いい子でも悪い子でもない」と回答した場合は0とした。被験者の各回答をこのように+2~-2の5段階に得点化し、条件別に平均値を算出した結果、TABLE 2のようになった。この得点について、年齢(4)×動機(2)×結果(2)×物語の提示順序(2)の繰り返しのある分散分析(MANOVA)を行った。その結果、まず年齢の主効果が有意であり (F(3,132)=2.82, p<.05), さらに Newman-Keuls 検定による対間比較を行ったところ、6歳児とその他の年齢群との間に傾向差が見られた (p<.06)。3・4・5歳児は6歳児よりも、向社会的特性

の方へ回答が偏る傾向があった。

また、動機の主効果 (F(1,132)=131.37, p<.001), 動機×年齢の交互作用 (F(3,132)=15.16, p<.001) が有意だった (FIGURE 2)。年齢別に動機の単純主効果を検定したところ、どの年齢群においても有意だった (3歳児 F(1,33)=8.27, p<.01, 4歳児 F(1,33)=6.96, p<.05, 5歳児 F(1,33)=66.83, p<.001, 6歳児 F(1,33)=68.71, p<.001)。そこで、提示された動機のタイプに一致した特性ラベリングを行う (e.g., P動機の場合に向社会的特性をラベリングする) 程度に年齢差があるのではないかと予測し、P動機における得点とN動機における得点の差 (P動機-N動機) を従属変数、年齢を独立変数とした1要因分散分析を行った (この差得点が大いほど、P動機条件では向社会的特性を、N動機条件では反社会的特性をラベリングしたことを意味する)。その結果、年齢差は有意であり (F(3,132)=15.16, p<.001), さらに Newman-Keuls 検定による対間比較を行ったところ

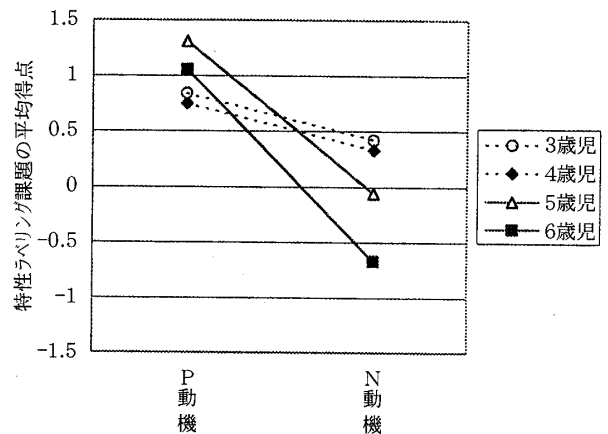


FIGURE 2 特性ラベリング課題における動機×年齢の交互作用

ろ、4歳児≒3歳児<6歳児≒5歳児の間に有意差が見られた($p<.001$)。従って、全年齢群において、N動機を持つ行為者よりもP動機を持つ行為者に対し向社会的行動をラベリングしたが、動機のタイプと一致している程度は3・4歳児よりも5・6歳児の方が大きいということが明らかになった。

また、動機×物語の提示順序の交互作用が有意だった($F(1,132)=10.94, p<.01$) (FIGURE 3)。物語の提示順序別に動機の単純主効果を検定したところ、どちらの提示順序であっても有意だった(順向提示 $F(1,135)=41.38, p<.001$, 逆向提示 $F(1,135)=100.01, p<.001$)。そこで、P動機-N動機という差得点について、物語の提示順序による違いを調べたところ、順向提示よりも逆向提示の方が大きかった($F(1,135)=10.95, p<.001$)。また、結果の主効果($F(1,132)=135.43, p<.001$)、結果×物語の提示順序の交互作用($F(1,132)=5.42, p<.05$)が有意だった。結果の単純主効果はどちらの提示順序でも有意だったため(順向提示 $F(1,135)=98.59, p<.001$, 逆向提示 $F(1,135)=64.38, p<.001$)、同様にP結果-N結果という差得点について物語の提示順序による違いを調べたところ、逆向提示よりも順向提示の方が大きかった($F(1,135)=5.53, p<.05$)。従って、動機が物語の最後に提示される場合の方が、最初に提示される場合よりも、動機のタイプと一致した特性ラベリングを行う程度が高く、また結果についても同様の提示順序の効果が認められるということが明らかになった。

以上で見出された年齢差や提示順序による差をより詳細に検討するため、次に、動機と結果が不一致であるときに、どちらをより手がかりとして特性のラベリングを行うかについて調べる。8条件のうち、動機と結果が不一致(P動機&N結果, N動機&P結果)である4条

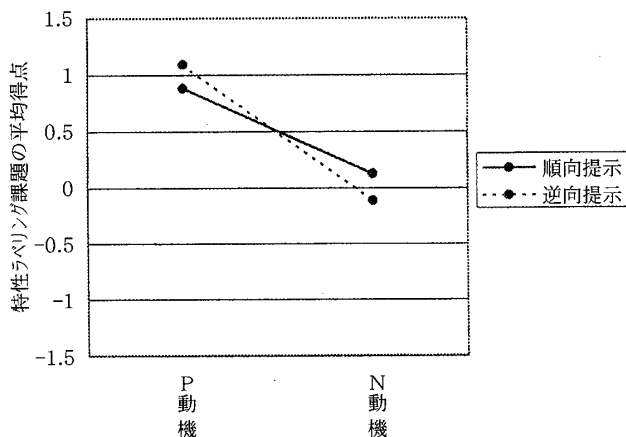


FIGURE 3 特性ラベリング課題における動機×提示順序の交互作用

件のみを分析対象とする。動機を用いるほど0より高く、結果を用いるほど0より低くなるように、被験者の各回答を、動機・結果と一致した特性が「すごく」当てはまると回答したらそれぞれ+2・-2, 同様に「ちょっとだけ」当てはまると回答したらそれぞれ+1・-1というように得点化し直した(「いい子でも悪い子でもない」は0)。物語の提示順序が順向提示・逆向提示のそれぞれにつき、動機・結果が不一致である2条件の得点を合計したため、得点範囲は+4~-4となった。条件別の平均値を算出した結果、TABLE 3のようになった。

TABLE 3 動機と結果が不一致の条件においてどちらの情報を用いたか

		順向提示	逆向提示
特性ラベリング課題	3歳児	-0.8(1.9)	-0.3(1.7)
	4歳児	-1.0(1.7)	-0.2(1.8)
	5歳児	-0.1(2.0)	1.2(1.7)
	6歳児	0.4(2.3)	0.9(2.1)
行動予測課題	3歳児	-0.1(0.5)	0.1(0.2)
	4歳児	0.1(0.5)	-0.1(0.5)
	5歳児	0.0(0.3)	0.1(0.5)
	6歳児	0.2(0.9)	0.5(0.9)

*得点が高いほど動機を、低いほど結果を用いたことを表わしている。()内はSD。

分析では、条件別に、得点がチャンスレベルである0よりも有意に高い(すなわち動機と一致した特性をラベリングした)か、低い(結果と一致した特性をラベリングした)か、あるいはチャンスレベルとの有意差がない(動機と一致したラベリングと結果と一致したラベリングを同じくらい行った)かを、t検定により調べた。その結果、まず3歳児と4歳児はどちらも、順向提示では0よりも有意に低く(3歳 $t(33)=-2.36, p<.05$; 4歳 $t(33)=-3.27, p<.005$)、逆向提示では0との差はなかった($|t|<1$)。そして5歳児と6歳児はどちらも、順向提示では0との差はなく($|t|<1$)、逆向提示では0より有意に高かった(5歳 $t(33)=4.18, p<.001$; 6歳 $t(33)=2.50, p<.05$)。従って、3・4歳児は、結果が最後に提示される場合は結果と一致したラベリングを行うが、動機が最後に提示される場合には動機と一致したラベリングと結果と一致したラベリングを同じくらい行うことが明らかにされた。一方5・6歳児は、結果が最後に提示される場合は動機と一致したラベリングと結果と一致したラベリングを同じくらい行うが、動機が最後に提示される場合には動

⁴ 各条件につき全て「いい子でも悪い子でもない」と回答した場合も得点は0となるが、そのような被験者は存在しなかった。

機と一致した特性をラベリングすることが明らかにされた。

特性ラベリングの理由づけ課題 特性ラベリングの理由として何に言及したかという観点から、被験者の各回答を「動機に言及」「結果に言及」「行動に言及」「その他」「回答不可能」の5カテゴリーに分類した。このカテゴリー化について、2人の判定者(1人は実験者)が独立に判定したところ、判定の一致率は87.6%であった。判定が不一致であったものについては、2人の判定者の協議により決定した。各カテゴリーに分類された回答の例をTABLE 4に示す。被験者が回答の中で、物語中の動機と結果の両方に言及した場合は、さらなる質問への回答によりどちらを中心に言及したかを判断し、「動機に言及」「結果に言及」のいずれかに分類した。「行動に言及」には、動機や結果には触れず、行動のみに言及した回答が含まれる。「その他」には、行為者の性別や外見的特徴、被験者自身の好みなどに言及した回答が含まれる。「回答不可能」には、回答しなかった場合や、「分からない」という回答、理由になっていない回答などが含まれる。最終的に、各年齢群において、各カテゴリーに分類された回答の割合はFIGURE 4のようになった。

回答数について、年齢(4)×カテゴリー(5)の χ^2 検定を行った結果、年齢によって各カテゴリーに分類された回答数に偏りが見られた($\chi^2(12)=239.46, p<.001$)。残差分析の結果、「動機に言及」は3・4歳児が少なく5・6歳児が多い(3・4歳児 $p<.01, 5$ 歳児 $p<.05$)、「結果に言及」は3歳児が少なく6歳児が多い(いずれも $p<.01$)、「行動に言及」は3歳児が少なく4歳児が多い(いずれも $p<.01$)、「その他」は6歳児が少なく4歳児が多い(4歳児

TABLE 4 特性ラベリングの理由づけにおける各分類カテゴリーの回答例

カテゴリー	回答例
動機に言及	<ul style="list-style-type: none"> ・喜ばせてあげようと思ったから。 ・(受動者を)泣かせようとしたから。 ・ボール渡したら喜ぶと思ったから。
結果に言及	<ul style="list-style-type: none"> ・お山にトンネル掘ったら、泣いちゃったから。 ・(受動者が)やったーって言ったから。 ・シャボン玉割ったら(受動者が)悲しんだから。
行動に言及	<ul style="list-style-type: none"> ・お水かけるから。 ・シャボン玉割っちゃったから。 ・落書きしたから。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・かっこいいから。 ・女の子だから。 ・私、鬼ごっこ好きだから。
回答不可能	<ul style="list-style-type: none"> ・分からない。 ・どうしても。 ・(「いい子」という特性の理由づけにおいて)いい子だから。

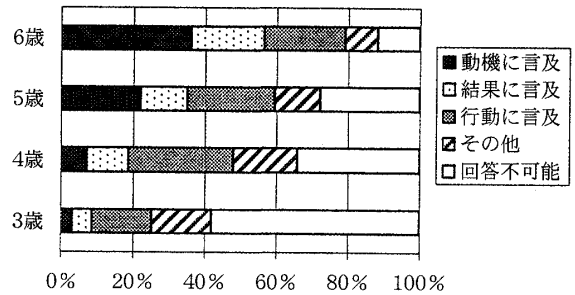


FIGURE 4 特性ラベリングの理由づけ

$p<.05, 6$ 歳児 $p<.01$)、「回答不可能」は5・6歳児が少なく3歳児が多い(3・6歳児 $p<.01, 5$ 歳児 $p<.05$)、という結果が見出された。従って、特性のラベリングにおいて何を手がかりとしていると報告するかについて、次のような発達過程が見出された。3歳児は何を手がかりとしたかを説明できない。4歳児になると約3分の2が回答するが、そのほとんどは行動や外見的特徴などに限られる。そして5歳児から、動機という特性の原因となるものに言及し始め、6歳児はさらに40%近くが動機に言及するようになる。

2. 特性は特定場面を越えて一貫した行動の原因となることを理解しているか? —仮説2の検討

行動予測課題 行為者が、2場面両方において向社会的行動・反社会的行動をすると回答したらそれぞれ+1・-1、1場面においては向社会的行動を、もう1場面においては反社会的行動をすると回答したら0と得点化し、条件別に平均値を算出した(TABLE 2)。この得点について、年齢(4)×動機(2)×結果(2)×物語の提示順序(2)の繰り返しのある分散分析(MANOVA)を行ったところ、まず年齢の主効果が有意だった($F(3,129)=3.42, p<.05$)。Newman-Keuls検定による対間比較の結果、6歳児とその他の年齢群の間に傾向差が見られ($p<.07$)、3・4・5歳児は6歳児よりも、向社会的行動の

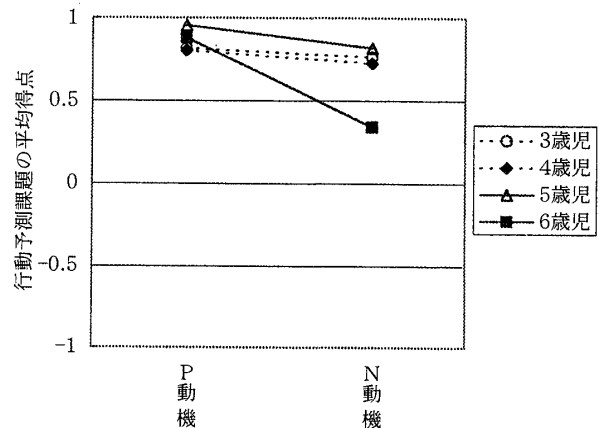


FIGURE 5 行動予測課題における動機×年齢の交互作用

方へ回答が偏る傾向があることが示された。

また、動機の主効果 ($F(1,129)=31.75, p<.001$)、動機×年齢の交互作用 ($F(3,129)=10.23, p<.001$) が有意だった (FIGURE 5)。動機の単純主効果は、5歳児と6歳児のみ有意であり (5歳児 $F(1,32)=5.80, p<.05$; 6歳児 $F(1,32)=76.38, p<.001$)、さらにP動機—N動機という差得点について、5歳児と6歳児の違いを調べた結果、5歳児よりも6歳児の方が大きかった ($F(1,64)=9.13, p<.01$)。よって、5・6歳児のみ、動機のタイプと一致した行動予測を行い、さらに5歳児よりも6歳児の方が一致している程度が大きいことが明らかになった。また結果の主効果が有意であり ($F(1,129)=19.48, p<.001$)、全体的に結果のタイプと一致した行動予測を行っていた。その程度において年齢差は見られなかった。そして、物語の提示順序は行動予測には影響を及ぼさなかった。

なお、予測場面において被験者自身が行う行動を尋ねた結果、反社会的行動を行うと回答した3歳児2名と4歳児4名以外の全員が、向社会的行動を行うと回答した。

以上で見出された年齢差を詳細に検討するため、次に、動機と結果が不一致の場合、どちらをより手がかりとして行動予測を行うのかを調べる。まず、被験者の各回答を+1 (2場面において動機と一致した行動を回答) ~ -1 (2場面において結果と一致した行動を回答) と得点化した。同様に2条件の得点を合計し、得点範囲は+2 ~ -2であった。条件別の平均値はTABLE 3のようになった。0との差について各条件別にt検定を行った結果、0よりも有意に高かったのは6歳児の逆向提示のみであり ($t(33)=2.95, p<.01$)、3・4・5歳児と、6歳児の順向提示においては、0との有意差は見られなかった ($|t|<1$)。よって、5歳児と6歳児の結果が最後に提示される場合は、動機と一致した予測と結果と一致した予測を同じくらい行うが、6歳児の動機が最後に提示される場合では、動機と一致した行動を予測することが示された。

3. [物語の動機—特性のラベリング—他場面における行動の予測] が一貫した推論を行えるか?

— 仮説3の検討

行動予測課題における結果は、物語の手がかり情報と行動予測の関連を調べたものであり、その間になされている特性のラベリングとの関連が明らかでない。特性ラベリング課題と行動予測課題の回答の一貫性を調べることが必要である。

そこで、まず特性ラベリング課題と行動予測課題の得点の相関を調べた。その結果、Pearsonの相関係数

は、3歳児が-.18 (n.s.)、4歳児が.13 (n.s.)、5歳児が.35 ($p<.05$)、6歳児が.56 ($p<.001$)であり、6歳児のみ2課題の回答に比較的強い相関があった。

次に、物語の動機・特性ラベリング課題の回答・行動予測課題の回答が全て一貫していた割合を調べたところ、3歳児は32.7%、4歳児は31.7%、5歳児は43.9%、6歳児は53.1%であった。年齢によって一貫していた割合に偏りがあるかどうかを調べるため、年齢(4)×一貫性 (2; 一貫・非一貫) の χ^2 検定を行ったところ、有意だった ($\chi^2(3)=34.77, p<.001$)。残差分析の結果、一貫している割合は6歳児が多く、非一貫の割合は3・4歳児が多かった (いずれも $p<.01$)。また、物語の結果・特性ラベリング課題の回答・行動予測課題の回答が全て一貫していた割合は、3歳児が29.0%、4歳児が26.9%、5歳児が21.4%、6歳児が14.0%であった。さらに、8課題全てにおいて、特性ラベリング課題と行動予測課題のどちらにおいてもポジティブ回答しか行わなかった者が、3歳児は23.5%、4歳児は9.1%、5歳児は12.1%、6歳児は3.0%存在していた。これらすべてを考慮すると、[物語の動機—特性のラベリング—他場面における行動の予測] が一貫している推論を行った割合は、5歳と6歳の間に大きく増加すると考えられる。

考 察

本研究の目的は、幼児における特性理解の発達を検討することであった。第1に、3・4歳児でも、特性→動機→行動の因果関係について理解しているが、年長になるにつれ、その理解が向上するだろう、という仮説について検討した。特性ラベリング課題において、3・4歳児でも動機と一致した特性をラベリングするが、5・6歳児の方がより結果に引きずられにくいということが見出された。また、特性ラベリングの理由づけ課題において、年長児ほど動機を手がかりとすると回答した。従って、第1の仮説は支持された。第2に、特性が特定場面を越えて一貫した行動の原因となるということを理解する年齢は、特性→動機→行動の因果関係を理解する年齢よりも遅いだろう、という仮説について検討した。行動予測課題において、動機と一致した行動を予測するのは5・6歳児のみであり、さらに結果に引きずられにくかったのは6歳児のみであることが見出された。この年齢は、動機と一致した特性ラベリングを行うことができるようになる年齢よりも遅いことから、第2の仮説は支持された。第3に、[物語の動機—特性のラベリング—他場面における行

動の予測]が一貫した推論を行えるようになるのは、年長になってからであろう、という仮説について検討した。このような一貫した推論は、5歳と6歳の間に増加するということが見出され、第3の仮説は支持された。

以上の結果から、幼児における特性理解について、次のような発達過程が示された。3・4歳児は、特性が動機と関連しているということについて理解し始めているようだが、まだ結果の方により注目しやすい。本研究で提示した物語では、結果は受動者が笑っている、悲しんでいるといった絵による視覚的情報があったのに対し、動機はそのような情報がなかった。従って、おそらく動機よりも結果の方が顕著な手がかりとなるため、結果に引きずられずに動機を用いるのは難しかったのではないかと考えられる。さらに特性ラベリングの理由づけ課題において、4歳児は容姿や性別などの外見的特徴もラベリングの手がかりとしていることが示されたことから、視覚的なものに注目しやすいという傾向が強いことが示唆された。ただし3歳児は、特性ラベリングの理由づけ課題において半分以上が回答不可能だったことから、物語の記憶が曖昧であった可能性も考えられる。

そこで、この可能性を検討する上での1つの指標を得るため、物語提示後に行った物語の再認における被験者の回答の分析を補足分析として行った。動機と結果の再認が正確だったかどうかについて、チャンスレベル⁵との差を調べた (TABLE 5)。その結果、3歳児のみ、動機と結果が不一致の場合に動機の再認がチャンスレベルとの有意差がなく ($t(33)=-.67, n.s.$)、他年齢群においては、どの条件においても動機・結果ともチャンスレベルより高く正しい再認をした ($t(33)>3, p<$

TABLE 5 物語の動機・結果を正しく再認した課題数の平均

		動機と結果が 一致している 条件	動機と結果が 不一致である 条件
3歳児	動機	3.1(0.9)	1.9(1.3)
	結果	3.4(1.0)	2.8(0.9)
4歳児	動機	3.7(0.6)	2.7(1.3)
	結果	3.8(0.5)	3.4(0.6)
5歳児	動機	3.8(0.5)	3.1(1.0)
	結果	3.9(0.4)	3.6(0.7)
6歳児	動機	3.9(0.2)	3.4(1.0)
	結果	4.0(0.2)	3.9(0.4)

*各条件につき4課題中の正解課題数を示している。
()内はSD。

⁵ 物語の再認における回答は二者択一であったため、チャンスレベルは半数の課題で正確に再認したことを指す。

.001)。これは、3歳児は動機と結果が一致しない時に、動機をゆがめて記憶するという Nelson(1980)の知見と一致している。本研究では、物語の再認を、動機と結果の記憶を促すことを目的として行っており、再認を誤った場合、もう一度動機と結果を提示して記憶を訂正させるという手続きを経ている。しかし、3歳児はそれでもなお不正確な記憶を保持し続けたのかもしれない。この点については、物語の記憶の保持についてさらに詳細に調べることにより、検討する必要がある。

5歳になると、特性→動機→行動の因果関係についてより確実な理解を持つようになり、それと共に、特性は特定場面を越えて一貫した行動の原因となるということを理解し始める。しかし、[物語の動機—特性のラベリング—他場面における行動の予測]が一貫した特性推論形態を示したのは6歳のみであることから、特性は特定場面を越えて一貫した行動の原因となることをより確実に理解するのは6歳からであるということが示唆された。

問題で述べたように、子どもにとって他場面における行動の予測は、特性のラベリングよりも困難であるということは、先行研究においても見出されている (e.g., Rholes & Ruble, 1984 ; Rotenberg, 1992)。しかしこれらの研究は、方法論上の問題から、明確な証拠を提供できない。本研究では、行動から動機と結果を切り離して提示し特性推論におけるそれらの情報の使用を調べ、また[物語の動機—特性のラベリング—他場面における行動の予測]の一貫性を調べた結果、3~6歳児の特性理解について、上述のような詳細な発達過程を明らかにできたと考えられる。

それでは、なぜ、特性→動機→行動の因果関係よりも、特性は特定場面を越えて一貫した行動の原因となることの方が、発達の遅くに理解されるのだろうか。それは、前者はある特定の場面に限られた因果関係であるため、場面の手がかりを用いることができるのに対して、後者は異なる複数の場면을横切った因果関係であるため、そのような手がかりを用いることができないからだと考えられる。年少児は特性を、この時期に理解される情動や願望 (e.g., Stein & Levine, 1989 ; Bartsch & Wellman, 1995) のように、一時的で場面に依存することの多い心的状態と同じように捉えているため、場面が異なっても一貫しているということを理解できないのかもしれない。

これは、本研究における子どもの誤回答の大部分が、向社会的行動へと回答が偏るポジティブバイアスによるものであることからとも言えると考えられる。回答の

前後になされた自発的な発言を調べてみると、特に3・4・5歳児の行動予測課題の回答において、向社会的行動を回答後、「先生がやさしくしなさいって言ったもん」「バケツ貸さなきゃいけないんだよ」というような発言が多く見られた。このような発言は、彼らが予測場面において一般的に要求される行動(すなわち向社会的行動)を回答したことを示している。つまり、物語場面と予測場面という異なる場面の一貫性を、特性を媒介として認知することができないのであると考えられる。しかし、ポジティブバイアスが見られた理由として、他の可能性も考えられる。ほぼ全員が被験者自身は予測場面において向社会的行動を行うと回答したことから、行為者ではなく被験者自身が行う行動を回答したのかもしれない。いずれにしても、ポジティブバイアスが見られたことは、各々の人物は独自の行動パターンを持つということの認識の欠如を表わしていると考えられる。この行動パターンの認識は、特性の理解にとって必要であると考えられる。つまり、このような行動パターンを認識できるようになって初めて、それを生み出しているものは何かということを考え、その1つに特性があるということに気付くようになるのではない。

しかし本研究において、行為者の特性を示す行動を1つだけ示したため、それを行動パターンとして捉える能力に年齢差が存在したのかもしれない。Fivush, Kuebli & Clubb (1992) は、3歳児は出来事知識を再現する時に多くの場面手がかりによる助けを必要とするが、5歳児は一度だけの経験の後でも一般的な出来事表象を形成できることを報告している。このような出来事の表象能力を始め、特性推論には様々な認知能力が関わっていると考えられ、今後これらの能力との関連を検討していくことが必要だろう。

本研究ではまた、複数の情報を提示するために生じてくる、方法論上検討すべき問題として、物語の提示順序による影響を調べた。予測される影響として、特性推論における手がかり情報の使用において、初頭効果あるいは新近効果が見られるのではないかとこの可能性について検討した。特性ラベリング課題において、どの年齢群でも、動機や結果が物語の最初に提示される場合よりも最後に提示される場合の方が、手がかりとして使用する程度が高まった。また、行動予測課題においても、ポジティブバイアスが他の年齢群よりも小さかった6歳児は、動機が最後に提示される場合に結果に引きずられることなく動機を多く用いることができた。この影響は物語を記憶する時点で及ぼされて

いるのではないかと、この可能性を検討するため、物語の再認において提示順序の影響が見られるかどうかの分析を補足分析として行った。動機・結果それぞれを正しく再認した課題数について、順向提示と逆向提示の差を調べた結果、動機・結果のどちらにおいても有意差は見られなかった(動機 $t(135) = -0.33$; 結果 $t(135) = -1.03$, n.s.)。従って、物語情報を記憶する時点においては物語の提示順序の影響は見られないが、記憶した情報にアクセスし特性推論に使用する時点において、新近効果が見られることが示唆された。

このように新近効果が見られたことは、特性推論過程において、年少児と年長児が質的に異なる方略を用いていることを示しているのではないかと。3・4歳児は、視覚的に顕著な結果に注目しやすいが、動機が最後に提示されることにより動機への注意が喚起される場合は、動機にも結果と同じくらい注目した。従って、3・4歳児は特性→動機→行動の因果関係の枠組みが不十分であり、替わりにより記憶の中で顕著なものを手がかりとするという方略を用いていると推測される。しかし5・6歳児になると、動機が最後に示される場合に限られるが、結果に引きずられずに動機を用いることができた。従って、5・6歳児は、未だ完全とは言えないが、特性→動機→行動の因果枠組みを用いた推論を行い始めている。さらに、5・6歳児は、動機が物語の最初に提示され、目に見えやすい結果が最後に提示される場合でも、結果だけでなく動機にも注目することができた。これは、5歳後半から結果から原因へさかのぼれるという内田(1985)の知見と一致している。つまり、因果の向きが固定されず、可逆的操作が可能で推論枠組みを持っていると考えられる。

以上のように、本研究は、特性推論における3・4・5・6歳児の加齢に応じた発達の変化を明らかにした。しかし、今後解決されるべき問題が残されている。

第1に、本研究では特性の因果性の理解に焦点を絞って検討するため、向社会的特性と反社会的特性のみを扱った。しかし、このような評価的な価値を帯びた特性は、比較的早くから理解されやすいという可能性も考えられ(Ruble & Dweck, 1995)、幼児がより分化した特性の概念を持っているかどうかは明らかではない。従って、今後さらに、評価的な価値を含んでいない様々な特性も扱うことによって、特性概念の理解についてより詳細な検討を重ねる必要があるだろう。

第2に、本研究で対象とした3歳児は、平均年齢が3歳9ヶ月であり、3歳5ヶ月未満の子どもは1名のみであったため、厳密には3歳後半児であった。これ

は、幼稚園あるいは保育園に通う幼児のみを対象としたために、3歳前半の幼児にほとんど出会えなかったこと、また実験を試みた数人において、実験者の話を全く聞かないなどの理由で実験を完遂できなかったことによる。今回被験者に含まれた3歳児が、特に複雑な物語において最後まで記憶できなかった可能性が残されることから、本研究で用いた物語は、3歳児にとっては情報が多く、認知的負担が大きかったのかもしれない。今後、新しい手続きを考案することにより、これらの点を改善し、さらに年少の幼児の能力について明らかにしてゆく必要があると考えられる。

また、本研究における6歳児は、就学前児を対象としたため、6歳7ヶ月までの幼児のみが含まれた。しかしそれでも、5歳児とは差があり、6歳児になると未だ不完全ながらも、特性のより発達した理解を示すようになることが明らかにされた。問題で述べたように、幼稚園や保育園は子どもにとって初めて出会う社会的集団である。本研究の結果から、幼児は集団を経験するにつれて、社会的相互作用において重要な役割を果たす特性概念の理解を発達させていくことが示された。そしておそらく、小学校というより社会的な集団の中で仲間との相互作用の経験を積むことによって、特性概念のさらに深い理解や、6～9歳児における自発的な特性用語の使用へとつながっていくのであろう。今後、認知的な要因と、小学校入学などの経験による要因の両方を考慮に入れて検討することにより、特性推論の発達過程をより全体的に捉えていけると考えられる。

引用文献

- Bartsch, K., & Wellman, H.M. 1995 *Children talk about the mind*. New York : Oxford University Press.
- Eisenberg, N., Cialdini, R., McCreath, H., & Shell, R. 1987 Consistency-based compliance : When and why do children become vulnerable ? *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1174—1181.
- Fivush, R., Kuebli, J., & Clubb, P. 1992 The structure of events and event representations : A developmental analysis. *Child Development*, **56**, 1437—1446.
- Gnepp, J., & Chilamkurti, C. 1988 Children's use of personality attributions to predict other people's emotional and behavioral reactions. *Child Development*, **59**, 743—754.
- Heller, K.A., & Berndt, T.J. 1981 Developmental changes in the formation and organization of personality attributions. *Child Development*, **52**, 683—691.
- Heyman, G.D., & Gelman, S.A. 1998 Young children use motive information to make trait inferences. *Developmental Psychology*, **34**, 310—321.
- Livesley, W.J., & Bromley, D.B. 1973 *Person perception in childhood and adolescence*. Chicester, UK : Wiley.
- MacLennan, R.N., & Jackson, D.N. 1985 Accuracy and consistency in the development of social perception. *Developmental Psychology*, **21**, 30—36.
- Nelson, S.A. 1980 Factors influencing young children's use of motives and outcomes as moral criteria. *Child Development*, **51**, 823—829.
- Rholes, W.S., & Ruble, D.N. 1984 Children's understanding of dispositional characteristics of others. *Child Development*, **55**, 550—560.
- Ridgeway, D., Waters, E., & Kuczaj, S.A. 1985 Acquisition of emotion-descriptive language : Receptive and productive vocabulary norms for ages 18 months to 6 years. *Developmental Psychology*, **21**, 901—908.
- Rotenberg, K.J. 1982 Development of character constancy of self and other. *Child Development*, **53**, 505—515.
- Ruble, D.N., & Dweck, C. S. 1995 Self-conceptions, person conceptions, and their development. In N.Eisenberg (Ed.), *Review of personality and social psychology : Vol.15. Social development*. Thousand Oaks, CA : Sage. Pp.109—139.
- Ruble, D., Newman, L., Rholes, W., & Altshuler, J. 1988 Children's 'Naive Psychology' : The use of behavioral and situational information for the prediction of behavior. *Cognitive Development*, **3**, 89—112.
- Stein, N.L., & Levine, L.J. 1989 The causal organization of emotional knowledge : A developmental study. *Cognition and Emotion*, **3**, 343—378.

内田伸子 1985 幼児における事象の因果的結合と産出 教育心理学研究, 33, 124—134.

付 記

本論文の作成にあたり, ご指導下さいましたお茶の

水女子大学内田伸子教授に, 厚く御礼申し上げます。また, 実験に快くご協力下さいました各幼稚園・保育園の先生方, 幼児の皆さんに, 心より感謝申し上げます。

(1999.5.13 受稿, 2000.2.28 受理)

Development of Trait Inference : Do Young Children Understand the Causal Relation of Trait, Motive, and Behavior ?

YUKI SHIMIZU (OCHANOMIZU UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2000, 48, 255—266

The present study examined whether 3- to 6-year-old children understand trait-motive-behavior causality, and whether they know that traits cause behaviors over situations. Children listened to stories each of which included a motive, behavior, and an outcome. They then labeled the main character's chief trait, and predicted the character's behavior in a different context. The results showed that 3- and 4-year-olds understood trait-motive-behavior causality, but their understanding was not as complete as that of 5- and 6-year-olds. Children over the age of 5 understood that traits cause behaviors over situations, but only the 6-year-olds in the present study understood this completely. It was also suggested that a recency effect was observed in these young children's trait inference.

Key Words : understanding of traits, preschool children, causal inference, recency effect